



浅間山

せんげんやま



令和4年度 No.4
可児市立東可児中学校
令和4年7月1日発行

第1ステージ → 第2ステージ

校長 明星 裕

令和4年度東可児中学校体育大会が3年ぶりに行われました。来賓の皆様、保護者の皆様には、持てる力の限りを出して正々堂々と戦い切る生徒の姿を見届けていただき誠にありがとうございました。

新型コロナウイルス感染症対策の一環として、種目数、来場制限、取組期間等、様々な制約のある中での開催となりました。

しかし、その制約があったからこそ、生徒会執行部を中心に、「生徒の皆は体育大会を楽しみにしているのか。そもそも、東可児中の体育大会は、何を目的としているのか。」

「スローガン『繫』の実現に向け、何に徹すべきなのか。」

「団対抗競技はない。1～3年生までの気持ちをどう融合させていけばいいのか。」

「体育大会の成功は、事前の取組による日常生活の底上げ、入退場での機敏な動き、運営に係る仕事に対する真剣な打込みとやり抜き等、競技以外の動きの質で決まる。限りある取組期間で、どこまで質を高めていくことができるのか。」

を求め、取り組んできました。そして、当日を迎えました。



▼追い抜かれても決して諦めず、地面を力強く蹴って走り切る姿がありました。強い日差しの下、最高記録を求めて最後まで大縄を跳び続ける姿がありました。伝える声・誘う声・聴く声・応える声・本音で語り合う声を具体化し、発し続けた姿がありました。自分たちの手で成功させようと分担された仕事をやり抜く姿がありました。

▼また、<練習準備・後片付け等、係の責任を果たす人がいた。コロナ感染症対策・熱中症対策が求められる中、仲間の体調を気遣う人がいた。大縄のとき、隣から声を掛け続け、記録を共に喜ぶ人がいた。この人こそ、仲間や集団を大切にしている本当の仲間だ。>など、単に「楽しかった」ではなく、取組期間中及び当日に深く心に刻まれた仲間のよさ（＝頑張りとその値打ち）を、振り返り時間、素直に伝え合う姿がありました。

生徒自身が笑顔で、生徒自身の手により、スローガン『繫』を実現していく姿に東可児中生の凄みを感じるとともに、溢れる感動をおさえることができませんでした。

今年度から、1年間を“役割をより明確にした4つのステージ「自覚」「強化」「表現」「継承」に分け、段階的に教育活動を推進しています。

前向きなエネルギーを持って力強く歩み出すとともに、仲間と共に学習・生活を創造するなかで、目標を明確にもつ“第1ステージ「自覚」が終了しました。各学級には、先述した体育大会や旅行・集団宿泊の行事等、核となる活動とそれに伴う合意形成を経て作られた、連帯感を表す目標が掲げられています。

“第2ステージ「強化」が始まりました。目標をめざし、日常の中での事実と実績を残し続けてほしいと願わずにはられません。

まずは、今年度から新設された「(地域貢献・社会奉仕) 校外お掃除探検隊」の発動です。

◆◆◆ 2人の東可児中生が可児市文化創造センターalaのステージに凛として立つ ◆◆◆

「『ドリームボックス』この言葉を聞いて、皆さんはどのようなものをイメージするのでしょうか。自分の欲しい物が入っている箱、夢が詰まっている箱等、明るくて楽しいものをイメージすると思います。しかし、この『ドリームボックス』とは……。」生田さんは、こう静かに語り始めました。

「食べ物は、私達が生きていく上で欠かせない存在です。別の命をいただいているということでもあります。私達の手に届くまでに手を加えてくれている生産者さんもあります。様々な存在への感謝の気持ちや、食べ物を口にすることができる有難さを、私達は忘れてしまっているのでしょうか。」榎本さんは、こう強く訴えました。

令和4年6月18日(土)、「令和4年度少年の主張可児市大会」が、可児市文化創造センターalaで行われました。程よい緊張感の中、東可児中の代表として選ばれた2人は、社会の一員として社会事象を咀嚼し、自分の中に置き換え打ち込んだ哲学を発表しました。

大ホールのステージに凛として立つ姿、聴衆の心を掴む間のとり方、具体的な数値情報が盛り込まれた説得力のある主張、一つ一つの言葉のセンスに強く心を揺さぶられたと同時に、私にとって、「人は何のためにどう生きるのか」を深く見つめ直す契機にもなりました。

生田さん、榎本さん、見事です。ありがとう。

